

重点取組分野	平成29年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①週3回の朝及び昼の学習時間帯を活用し、国語・算数の基礎的な技能の習得を図る。 ②学力・学習状況調査等を活用し実態を把握し、個に応じた指導を進める。 ③学校と家庭が連携して家庭学習に取り組めるようにし、基礎・基本の定着を図る。	①朝・昼の帯学習では、教科書や計算ドリル等の練習問題に取り組むことで、国語・算数の既習の学習内容の習熟・定着を図った。②③学力・学習状況調査等を活用し、重点的に指導することを明確にして、日々の授業や家庭学習の課題づくり等に取り組んだ。	A
豊かな心	①日常の道徳教育と「道徳の時間」との関連を図るとともに、「道徳の時間」の授業公開を行い、保護者や地域と連携して道徳性の育成を図る。②ベア学年集会やベア学級交流等の異学年交流を計画的に取り入れ、互いに高め合えるようにする。③祭などの地域行事や宿泊学習や校外学習など、体験を伴う活動を通して、協力していこうとする心情を育てる。	①「道徳科」の授業公開を行い、保護者や地域と連携して児童の道徳性の育成を図った。②ベア学年での集会を行ったり、ベア交流給食会、ベアウォークラリーを行ったりして、交流を深めた。③宿泊学習や校外学習等を通して、みんなで協力しながら行動しようとする心情を育てられるよう取り組んだ。	A
健やかな体	①長縄集会(年2回)・マラソン大会を行ったり、運動会に中距離走を取り入れるなど、友達と協力して運動に取り組む姿勢を育み、持続する力や巧みな動きの向上を図る。 ②地区のウォークラリーやロードレースなどのスポーツイベントを学校と地域が連携して行うなど、児童が運動の楽しさや喜びを実感できるような機会の充実を図る。	①運動会では、学年の友達と協力して進んで運動に取り組むことができた。長縄集会は、各クラスごとに目標を設定してベア学級で一緒に練習を行なった。今年度のベアウォークラリーは、新治市民の森にコースを変更し、歩く距離を増やすとともに三保の豊かな自然に触れることができる充実した活動になった。②地区のウォークラリーやロードレース大会など多くの児童が運動の楽しさや喜びを実感できた。その際、学校と地域が連携して、	A
教育課程	①授業研究・校内研修等を充実させる教育課程の整備及びESD(持続可能な開発のための教育)を中心としたカリキュラムマネジメントを継続的に進める。 ②年間9回の授業研究を行い、授業公開・協議会を通して、授業力・指導力の向上に努める。	①横浜市ESDコンソーシアム推進校として、校内重点研究会や校内研修等を活用して、単元や題材等の見直しや検証も含めたESDを中心とするカリキュラム開発を進めてきた。②研究授業後の協議会内容を深めるよう工夫し、互いに学び合う中で授業力・指導力の向上を図った。また、持続可能な研究会の在り方を考え、教師の働き方、指導の仕方についても	A
児童生徒指導 いじめへの 対応	①「スタンダード」「児童の約束」等学校のきまりを全職員で共通理解し指導にあたる。 ②校長をリーダーとし、児童支援専任を中心に、担任、学年等チームによる支援を進める。 ③学年研や職員会議で情報の共有を図ることはもちろん、日常的に児童の様子について職員間で伝え合うようにする。 ④「子どもの社会的スキル横浜プログラム」を授業や学校行事の場面で活用する。	①定期的に「スタンダード」や「児童の約束」等を見直し、共通理解を図りながら全職員で指導にあたった。②支援が必要な児童について保護者と教育相談を行い、組織的かつ継続的に学習支援を行った。③児童の課題について学年研や職員会議で情報共有を図り、組織的な対応を進めた。④「子どもの社会的スキル横浜プログラム」等を活用し、人間関係の把握や関係づくりに役立てた。	B
安全管理 地域連携	①土曜授業を活用して保護者・地域と協働した避難訓練を行ったり、地域の見守り隊や保護者の見守りボランティアと連携して児童の登下校指導を行ったりする。②田んぼ、川、森など、地域のよさを生かす学習に取り組む。地域行事に児童、職員が積極的に参加する。③学校運営協議会とともに学校運営の改善を進め、よりよい学校づくりを進める。	①昨年度に引き続き、地域防災訓練を学校の避難訓練と連動して行った。②「こども川の日」等地域行事に今年度も多数の児童・職員が参加し、地域や自然への理解を深めた。③学校運営協議会を年間4回開催し、昨年度同様、本校の教育活動について意見を頂き、学校運営に生かした。	A
特別支援 教育	①個別の教育支援計画、個別の指導計画を作成し、保護者と共有し指導を充実させる。②担任間の打ち合わせを積極的に行い、個別支援学級と一般学級の子ども同士の交流及び共同学習を実施する。③校内委員会で情報を共有するなど、特別支援教育コーディネーターを中心に校内体制を整え、一人一人の教育的ニーズに応じた支援の充実を図る。	①個別の教育支援計画・個別の指導計画を作成し、保護者と共有しながら個別指導を進めた。②学年研を中心に情報共有を図り、交流及び共同学習がスムーズに行えるよう努力した。③支援が必要な児童について校内委員会で情報を共有し、担任・特別支援教育コーディネーター・児童支援専任が連携して支援を進めた。	A
人材育成・ 組織運営	①メタチーム及びミドルリーダーは各の業務を通して、そのキャリアステージに応じた資質・能力を身につける。②校内での実践、人権、特別支援等の研修を計画的に進める。③学校評価を年2回行い、全職員が自己点検自己評価に取り組み、責任を持って学校経営に参加できるようにする。④会議を精選し、各部署の連携のもと効率のよい組織運営に努める。	①月1回、メタチームによって様々な研修を行った。②夏季休業を活用して、教科・人権・児童理解等について校内研修を行い、情報の共有化を図った。③学校評価を各組織・学年毎に行い、課題を共有した上で改善策を講じた。④校内組織の見直し、会議の精選、各部署の連携のもと、効率のよい組織運営に努めた。	A
ブロック内 相互評価 後の気づき	今年度も、授業研究会を前期に中学校、後期に小学校と計2回行い、昨年度に引き続きユニバーサルデザイン授業づくりの視点を取り入れ、小中学校の接続を意識した教育課程の実践・改善に努めた。特に今年度は道徳の授業について、ブロック内で共通理解を深めた。梅田川水辺の楽校「こども川の日」やロードレース大会、各自治会のお祭りなど、地域の行事に参加する児童生徒も多い。小中交流日には、中学校での授業体験、生徒会による学校説明会、部活動見学を行い、2～3月には部活動体験もしている。今後も児童生徒、職員ともに小中の交流を継続し、9年間の発達段階を考慮した児童生徒指導のあり方等、相互理解を進めていきたい。		
学校関係者 評価	上学年児童が下学年児童を見守りながら登校している様子から、ベア学年活動などの異学年交流が自然に行われていることが窺える。1年生も年度当初と比べて成長が見られる。子どものアンケート結果も「よくあてはまる」「あてはまる」の評価が多いので、今までの取組を自信をもって続けていってほしい。保護者も共働き世帯が増えて大変だが、生活指導に関しても、学校と家庭がもっと連携して取り組んでいけるとよい。見守り隊の活動をしていると、子どもたちから声をかけられるようになった。見守り隊が浸透してきたと感じると同時にやりがいも感じている。授業が土曜日に設定されていると、地域ボランティアとして参加しやすい。		